

## ネイチャーから自然へ

英語の「ネイチャー」とその訳語としての日本語の「自然」の間にはどこかずれがあると感じたことがある。それはひとつにはラテン語のナトゥーラから派生していったヨーロッパのことばが日本に入ってくる過程で、「自然」という訳語に定着していくまでにかかなりの時間を要したという事実からおおよそ想像できる。「自然」のばあいには、まったく新しいことばが造られた「社会」や「個人」などとはちがった状況があった。社会や個人という概念のまったくない風土の中で、まったく見なれない新語の登場となつたのはまことに無理からぬことであったが、自然のばあいには、ナトゥーラ系のことばが入ってくる前から、とに

## 大庭 勝

かくこのことばが存在していたのであった。手もとの『広辞苑』（第二版補訂版）の自然の項では第一に、「おのずからそうなっているさま。天然のままて人為の加わらぬさま。」と語義を記したあとに、「（副詞的にも用いる）」と添え書きがしてあり、『枕草子』第二六七段から「―に宮仕へ所にも……思はるる思はれぬがあるぞいとわびしきや」という例と、「―そうなる」という例とがあげてある。『広辞苑』のこの項の二種類の引用からもこの語には副詞的用法が深くからまつている様子がうかがわれる。これに対して『大辞林』では「自然」は名詞、形容詞、副詞の三つに歴然と分けられている。この方が現状にぴたりと合ってい

るが、『広辞苑』の表示からは、自然ということばのおかれた、かつての姿をうかがうことができる。

また、『国語大辞典』(小学館)の「自然」の項は、まず名詞と表示されているが、一の1では形容動詞もあるほか、「山、川、海、草木、動物、雨、風など、人の作為によらずに存在するものや現象。……」と規定されている。ここでも名詞と形容動詞が同居しているということから、自然ということばのおかれた不透明で複雑な状況が想像できる。『大漢和辞典』(大修館)の「自然」の項には、四項目の名詞、一項目の副詞(「ひとりで」)が併記されている。『大漢和辞典』の自然の項には天然などと並んで「おのづから」が記されているが、これは明らかに副詞である。中国からの影を引ききっているのである。

初期の英和辞典ではネイチャーの訳語としては「天地万物、天地自然ノ道理」などということばが登場しているが、『自然』はなかなか姿を見せない。いわゆる『薩摩辞書』(明治二年刊行の『和訳英辞書』)では形容詞のナチュラル(初期の英和辞典の多くが原綴に添えて発音を片仮名で表記している)には、自然ノ、天地万物ノ、などの訳語を、また、副詞のナチュラルには、自然ニ、人巧ニ依ラズ、などの訳語があげ

られている(傍点筆者)。では、名詞のネイチャーはどうか。ここにはかなりの数の訳語がひしめいている。すなわち、天地万物、宇宙、本体、造物者、性質、天地自然ノ道理、品種、である。この中では、天地自然ノという部分に「自然」が顔をのぞかせてはいるものの、いぜんとして、自然が単一で名詞の訳語としては登場していない。

『古語大辞典』(角川書店)には享保(一七二六―一七三六)年間に成立した、初代芳沢あやめの芸談『あやめ草』から、「上手の自然といふものなりとぞ。」という部分を引用している。一六〇〇年代はじめに刊行された『日葡辞書』では、しぜん(もし)ひよっとして、しか記されていないけれども、名詞的用法を否定しているとは言えない。ついであるがら、自然ということばは、自然の事、または、自然の時、の略として用いられることもある。『国語大辞典』は、自然の事について、①万一の事、もしもの事、非常事態、さらに、②特に、死ぬことをいう、とあり、『日葡辞書』に記録された、(もし)ひよっとして、と相通するものをもっていると考えられるのだが、自然という語のもつ意外な一面をのぞかせている。

『仏教大辞典』(世界聖典刊行協会)には、「自然」の項は

なく、「自然外道」の項に、一切の万物は因縁によらず、唯自然にして生ずと計する外道を言ふ、とある。ここには西洋の、造物主に近い概念がのぞいており、超越者の存在がほのめかされている。

ここまでのところで言えることの一つは、「自然」は名詞としてはあまりはつきり意識されていなかったということである。その「自然」がネイチャーの訳語として定着していく過程は、「社会」のような新造語の場合と似てはいるものの、全く新しい用語で示されたソサエティの概念と、すでにあつた、しかもあまりはつきり名詞として意識されなかつた「自然」の場合とでは微妙なくいちがいがある。ネイチャーの導入以前の「自然」のもつていた「おのずからそうなっているさま。天然のまままで人為の加わらぬさま」(『広辞苑』)に加えて、ネイチャーによって導入された「精神に対し、外的経験の対象の総体。即ち、物体界とその諸現象。」(『広辞苑』)が、はじめは、きわめてぎこちなく混在していた。このような状況の中で、巖本善治の「文学と自然」をめぐって、森鷗外との間に論争がおこった。(巖本の論はまず明治二三年の『女学雑誌』に、鷗外の論は同年五月『国民之友』に載つた。)この事件は西洋文明が怒濤の如く押

し寄せた明治の時代には度たび、そして平成の今日でも大なり小なり起こっている混乱なのである。しかし積極的に西洋に学んだ明治の人たちは、混乱と誤解と少なからぬ不便をかいくぐって、次つぎに西洋の事物をとりこんでいった。福沢諭吉の「演説」や西周の「哲学」、「主観」や「客観」などという訳語もその頃に登場している。

夏目漱石は初期の『吾輩は猫である』(明治四〇年)で、「ことによると社会はみんな気狂の寄り合かも知れない。」とか、「画をかくなら何でも自然、其物を写せ。」などと、もうすでにかなりすわりのよい感じで、「自然」や「社会」を使っている。また、これよりさきに、北村透谷は(以下、透谷からの引用は、すべて明治文学全集29巻の北村透谷集による)明治二六年五月三日発行の「平和」第一二号に載せた「復讐」の中で「……社会自らは其社会の一部分なるものとしてしたる害に対して復讐すべきところあるなきなり。」と表記する一方で、この前のパラグラフでは「社界」とも書いていて、表記の揺れを示しており、この時点ではまだかなりぎこちない。また、自然については、同じ年六月一七日付けの「評論」第六号所載の「熱意」というエッセイの中で「人間の五官は、靈魂と自然との中間に立てる交渉器な

り。靈魂をして自然を制しむる是なり。」と、また、同年一〇月七日付けの「評論」所載の「万物の声と詩人」の中でしきりに自然に言及して、たとえば、「自然は不調和の中に調和を置けり。」とか、「自然は広漠たる大海にして人生は延々たる浮島に似たり。」(傍点筆者など)と使っている。ここに引用した透谷の文は漱石の『猫』より一〇年以上前のもので、「社界」などに、わずかながら時の流れを感じることができるとある。

明治二七年五月、わずか二五歳四カ月の生涯を閉じた透谷は、晩年キリスト教に深い関心を示し、明治二二年暮にはフレンド派の伝道演説などもしているが、彼が洗礼を受けたのは前年三月のことだった。これは「驚くべき洪水の如き勢力を以て神に感謝し神に帰依すべきを發悟」した結果であり、神のもとでの平等と、挫折した過去という負い目からの救いを求める気持を意味していたと考えられる。

明治二五年九月一五日付けの「平和」六号(「平和」は透谷がフレンド派の教会員と共に、日本最初の反戦平和の雑誌として創刊したもので、彼はその編集者兼主筆であった)に、当時のいわゆるキリスト教徒の「朝に入りたるもの夕に出で、出没常なく去就定まりなし」という有様をなげいて「各人

心宮内の秘宮」(明治二五年九月)という一文を書いた。この中で透谷は、「洗礼を施すは悪きことにあらず、然れども其を以て基督の弟子となるに欠くべからざるの大札となすは非なり、心を以て基督に冥交する時彼は無上の榮ある基督の弟子なり、……凡て心の基督に通じたる時即ち心が基督の水に浴したる時……真に基督の弟子となりたるなれ……」と述べている。

透谷がはじめてエマソンの著作に接したのがいつのことか定かではないが、明治二五年二月に発表した「厭世詩家と女性」の中で二箇所、〈恋愛〉や〈婚姻と死〉とについてのエマソンのことばを紹介している。また、翌二六年五月の「内部生命論」の中で、「基督的樂天詩家の親たる造化は悉く有望的樂天的なり」と述べている部分は明らかにエマソンを念頭においているように思われる。

ところで、この洗礼にかんする考え方は、エマソンが牧師の地位を退くにいたった心境がよく示されている。「主の晩餐」(二八三)というエッセイの中で、主の晩餐の儀式についての意見を述べているが、透谷の、洗礼についての考え方と共通したものが色濃くうかがわれる。エマソンは、歴史的にみて、福音書の作者のうち、マタイとヨハネがキ

リストの最後の晩餐についてこまかく述べたとき、後世の者がこの儀式を守るべきだとは少しも言っていないという事実をまずはつきり指摘し、次いで、この儀式を止めてしまったキリスト教徒たちの考え方に言及して、二つの理由をあげている。一つは、この儀式が単なる地方的慣習であること。第二は、この儀式に用いられるパンとぶどう酒が元来シンボリックなもので、それが意味する贖いを理解する助けにはならないということである。

次にエマソンは福音書の筆者たちが、イエスがこの儀式を永続的なものにしよと考えていたとは思われないこと、そしてまた、パウロが当時の儀式の嘆かわしい状態を批判したことを指摘した。エマソンは、こうして、この儀式が、キリストを記念する方法としてはふさわしくないものであるから、この儀式を止めるべきだと考えた。そして自分の考えを教会の信者の前に率直に披瀝し、彼らの判断を仰ぎ、その結果、エマソンはいさぎよく教会を去った。エマソンは「心をもつて」キリストを愛する道を選んだ。その結果、彼は牧師の地位を棄てることになったのではあったが、エマソンも透谷も宗教の形式的な部分を否定した点に共通する考え方がみられる。

民友社の『十二文豪』のシリーズの中に（エマソン）が入るのは、あまり当を得た人選ではないように思われて仕方がないのだが、それはたぶん、文豪Ⅱ大作家という図式にこだわるせいであろう。このシリーズには頼山陽や荻生徂徠もまじっていることを考慮に入れれば、ベスト・メンバー十二名と見なすにも及ばないと言える。

透谷は明治二六年夏『エマルソン』にとりかかったが、この頃すでに体力の衰え甚だしかった彼は病軀にむち打つてこの評伝を書きあげ、島崎藤村が原稿を整理して民友社に渡し、翌二七年四月に本になったが、透谷自身は病床にどいた本を手にとるだけで、もはや中をあげて見る気力さえもなかった。

この記念すべき労作『エマルソン』は透谷のエマソンとの幸福な出会いの成果と言えるであろう。キリスト教への共通の関心、両者が共有する詩人的資質などがこの作品を充実したものにしている。透谷は病いの床で、挫折と悩みに満ちたわが生涯をふり返りながらエマソンの「楽天主義」に憧憬の念を覚えたであろう。そのエマソンの著作の中に『自然』（一八三六）があつたのは偶然ではあるまい。そして、はるか彼方のニューイングランドの自然を思い描きながら

詩人はこの評伝を書きすすめていったのであろう。

『十二文豪』のシリーズは、まず第一が『カーライル』、次いで『マコウレー』とつづいて第五の『ゲーテ』までが明治二六年七月から十一月まで毎月一冊ずつ刊行されている。カーライル、マコウレーと並んだところにこの時代

——開国以来まだ日も浅い文明開化の時代、間もなく隣の大國、清國を相手の戦いを控えた時代——の、近代國家を目ざして突進していた人々の空氣が感じられる。人々は新しい國の指標を、哲學を、熱心に求めていたのであろう。とすれば、いささか場ちがいとも見えたエマソンも、ぴたりとこの構図におさまるはずである。十二人のあとに、番外としてジョンソンが入っているところを見ると、『十二文豪』の顔ぶれの選定も、意外にふところが深いやり方と言うべきである。

哲學者の導きを求めていた時代に、透谷が『エマルソン』に託したものは、この評伝の「評」の部分にあきらかに示されている。何よりも、明治維新と獨立戦争との、いずれも大變革のあと、近代國家としておぼつかない歩みを進めていた日本とアメリカという狀況が、アメリカへの親近感をもたせたのであろうし、透谷が通訳などの仕事を通じ、

またキリスト教徒としての修行の過程で、いくたりかのニューイングランド人に接したのはたしかであるから、このあたりからもエマソンへの親愛の情はかもしだされていったのであろう。

明治という時代に、ニューイングランドと日本とは、想像したいほどの密接なつながりをもっていたことがわかる。ウィリアム・S・クラークは明治九年に札幌農學校にやつて来て、一年足らずの短い間であつたが、キリスト教精神と科學教育を通じて、内村鑑三や新渡戸稲造らの人材を育てることになった。また、ハーヴァードを出て間もなく、まだ二十代の若さで、明治一一年來日し、東京大學で哲學を講ずる一方で日本の美術界に刺激を与えたアーネスト・フェノロサはニューイングランドの北東部メイン州南部の町ポートランドの産。明治一〇年に來日し、大森貝塚の發見で知られるエドワード・モースはボストンの北東二〇キロほどの港町、小説家ホーソーンの故郷でもあるセイレムの出身で、彼の蒐集した日本の工芸品の数多くのものが今でもセイレムのビーボディ博物館に所蔵展示されている。

一九世紀末のアメリカ合衆國はようやく西海岸まで開拓

が完了したという国勢調査局の発表が行なわれたばかりで、開拓の手が入ると間もなく設立されていた州立大も西部ではこの頃ようやく姿をあらわしたという状況であったから、アメリカの学術文化というものがもし形成されていたとすれば、それは東部、とくにニューイングランドにおいては他になしという事情も考慮に入れておく必要がある。明治維新直後の明治四年一月、わずか七歳の津田梅子や、のちに大山巖夫人となった山川捨松などが留学したのも東部の由緒ある女子大であったことも思い合わされる。また明治四年（一八七二）一月に横浜を出航した岩倉使節団の一行がサンフランシスコ、ソールトレーク、首都ワシントンから、ニューヨーク、ナイアガラを経て波士敦府（ボストン）に到着したのが、翌明治五年五月、さらにワシントンにもどり、もう一度北上してボストン入りしたのは六月二八日で、一週間ほどの滞在ののち、一行はイギリスの港リバプールに向けて出航するのだが、このボストン滞在中に、パーティに招かれた。それは、久米邦武編『米欧回覧実記』によると、六月二八日のことである。

夕四時ヨリ、「ホテル」に於テ、府中ヨリ享宴ヲ開ク、  
会食ノモノ百八十人アリ、食後ニ「スピーチ」アリ、

夜十時ニ至リ漸クニ徹ス、桑港以来、盛会ナリ、……  
(岩波文庫版による)

このときの「スピーチ」は「コンコードのエマソン」によるもので、彼は日本と武士道について語った。

また、留学中の神田乃武は一八七九年三月一九日に、アマースト・カレッジでエマソンの「最上級」というスピーチをきいた。神田はエマソンが、自然は簡明平易な形で表現し、最上級を濫用しないことを例えにもひいたこのスピーチに感動したことを英文の日記に書きとめている。

初代駐米公使森有礼が神田乃武とともに留学生として伴った外山正一は帰国後、東京大学でエマソンのエッセイを講じ、明治一五年と一六年にエマソンのエッセイを編集出版している。さらに明治二三年には、日本に於けるエマソンの翻訳としてはさいしよの、佐藤重紀訳『文明論』が博文館から出版されている。

以上述べたような事情が北村透谷を取り巻いており、彼がエマソンに近づく機会は十分に準備されていたと考えられる。『エマルソン』の「小序」で透谷は、

……此の吾人が哲人に伝へたる文章エマルソン全集一  
巻は今吾人と与にあり。

と書いている。島崎藤村の『春』に登場する青木という人物の言葉から考えると、十二文豪のシリーズでは透谷はむしろゲーテを望んでいたとも考えられるが、明治二六年夏にエマソン論に着手したのは、このシリーズを計画した民友社の主宰者で、かねてからエマソンに親しんでいた徳富蘇峰のすすめによるものであった。蘇峰は透谷の『エマソン』のあと七年たった明治三四年に、同じく民友社から出版された『惠磨遜の書簡』に添えた解説「惠磨遜」でエマソンにかなする資料をいくつかあげているが、これは透谷が『エマソン』の中で言及しているものと大方一致している。しばしば言及されているのがマシュー・アーノルドで、透谷は『エマソン』の「其五 エマソンの自然教」の冒頭では、

英国の批評家アーノルドは彼を以て、羅馬のアーレリアス王（筆者註 次の文ではアウレリアス王となっている。傍点筆者）に比せり。

と述べ、アーノルドがエマソンを「思想界に於ける、帝王なき国の帝王としたるも敢て異しむべきにあらず」と付け加えている。この評価は『エマソン』全体にわたるもので、この評伝のさいごを、「余は切に他のエマソン紹介

者を待つ者なり。余は伝へしと言はず、論ぜりと言はん」という言葉でしめくくっているが、真向から批判するという態度はもちろん、いささかでも強い口調で異議、不賛成を申し立てるということは一度もしていないのである。

エマソンの『自然論』が生まれる直接のきっかけはヨーロッパ旅行中、一八三三年夏のパリでの動植物園見学のときの感銘にあるといつてよいだろう。エマソンは動物の異様な、または美しい姿が人間の内面の何かを示していること、あの恐ろしいさそりと人間の間に不思議な関係があること、自分の中にむかや狐の存在を感じる、などということを日記に書きとめ、ナチュラリスト（博物学者）になろうと思いつく。このときから、『自然論』が発表される一八三六年までの三年間に、「博物学者」（二八三四）を発表しているが、ヨーロッパ旅行の前に書かれた「天文学」（二八三二）にはすでに自然への積極的な取り組みがあるといえるだろう。エマソンは「天文学」の中で、天文学の進歩が、自然の偉大さと精神の偉大さとを調和してくれたこと、天文学の進歩が人間をより高い真理へと導くことを指摘している。

つぎのエッセイ「博物学者」（二八三四）も当然のことな



がら、自然に深くかかわっている。自然が創造主の作り出したものであることを前提とし、その自然の中心に立つのが人間であるという考えはエマソン個人のものというよりは西洋の考え方の基本であるが、ここには、例えば、背景いっぱい山野が描かれ、人物はごく小さく、大自然の点景としてつましく位置を占めている東洋の山水画の趣と真向から対立する観念が見られる。ところで、自然の中に立つ人間は、文明の利器を手にしたため、天文学よりは時計とコンパスに頼るようになり、暦の上の月日に目を奪われて天文学の教えてくれた月日を見失い、春分、夏至、秋分、冬至といった自然のしるしを忘れてしまった、つまり、自然に、じかに触れることがなくなってしまった、とエマソンは指摘しているが、これは、次に登場する「自然」の冒頭で述べられる、われわれが古人の目をとおしてではなく、古人がかつてしたように、自分の目で、「宇宙との独自の関わりをもつ」べきだという主張へと発展していくことになる。ついでに言えば、「アメリカの学者」(二八三七)の冒頭で、アメリカ人の「他の国ぐにの学問への長期にわたる徒弟の時代は終った」と述べたのと、きわめて近い、自己の独自性を前面に押し出した考え方である。「アメリカ

の学者」は、アメリカ合衆国が独立後すでに半世紀以上を経て、精神的にも独立しようという考えを強く主張しているが、この一九世紀半ばという時期にはアーヴィングやホーソン、さらにはメルヴィル、ホイットマンなどの作家たちも、それぞれの形で、アメリカの独自性を主張していたのであった。

「博物学者」の中でエマソンはさらに、自然には意味があるのだという考えを明示している。ピタゴラス、スウェーデンボルグ、ゲーテなど、先人の名をあげ、さらにインダの婆羅門をも引き合いに出して、自然の秘密に迫ろうとする、人間の挑戦についてふれている。「詩歌と解剖の両方」を信じるエマソンは、この二つの手段で自然の秘密——基本的法則、超自然の力(傍点筆者)——に到ろうとする目標を示す。彼は感性と理性という対照的な二種の武器で戦う。エマソンの求める「基本的法則」は、キリスト教にもとづいたものではあっても、その枠を抜け出したものである。形にとらわれた聖餐式を否定したことがきっかけで聖職を自ら退いたエマソンにとつては、じかに自然にふれ、自分独自の感性と理性とによって自然の秘密を手中に収め、自然と一つになることによって同時に神と一つに

もなるといふ道を突き進むといふやり方で、彼が常に説いてやまない「道徳」に到達するはずであつた。

一八三三年一〇月にヨーロッパの旅から帰つたエマソンは、翌年秋、少年時代以来しばしば休暇を過ごしたコンコードの牧師館に移り住んだ。ここはのちに、遅い結婚をした友人ホーソンが新婚時代を「アダムとイヴのように」過ごし、また、のちに短篇集『旧牧師館の苔』を執筆した家であつた。川の畔りのこの閑寂な牧師館で『自然』は書きすめられた。彼はコンコードの自然を愛し、町はずれのウォルデンの池の畔りにわずかばかりの地所を手に入れたりもしている。のちには別に一戸を構え、また、この町に居を構えたホーソン、オールコット、ソーローなどの友人たちとも親交を深めた。

透谷は『エマソン』の冒頭の「小序」の結びでエマソン評の基調を明らかにしている。

……米國はエマソンにおいて一の靈妙なる神泉をもてり。物質的進歩の大潮滔々として全米州を襲へるの時、その一小村なるコンコードは造化の最愛児なるエマソンを生めり。歴史なく、制度なく、故実なく、信条なき民、はじめより自由に生れ、はじめより平等

に生まれたる亜米利加の新民をして、金是権の俗生活より、宇宙の理法、天然の宗教に耳を傾けしめ、新しき経験と新しき歴史を作らしめ、世界に比類なき新民、主制を興さしめ、自然と人間とを調和せしめたるもの、其の功豈に偉ならずとせんや。……

この一節には透谷がエマソンの中に発見したものが要約されている。近代国家としてのスタートを切つた日本の真摯な青年透谷がエマソンを憧憬の目で見つめていることがよくわかる。

エマソンの伝記の部分で透谷は、「特に大筆せんとするは、彼の生涯の和平にして波瀾なく、曾つて一度の汚点印せし事なき是なり」と言い、また、「靜平無事」と言い、「彼は楽天家として生れたり」（この点に関しては後で修正を加えているが）と言っている。このあたりには、年若くして世を去る運命の詩人の嘆息が耳に響くように思われる。続けて、「遙かにカアライルよりも賢こく且つ樂しき生活を撰めり」とつけ加え、エマソンが「尤も自然に近き生涯を送」（傍点筆者）つたとも述べている。

『自然』について語る第二章でも、エマソンのことを「この幽寂なる楽天家」と言っているのをみれば、「楽天的」

な印象がよほど強かったものと思われる。そしてそれは「その本国の共和制と尤も適応した」考え方であると指摘する。「詩的、哲学的の眼光は更に他の事実、事実の外の事実を視る」エマソンは同時に、主として自然の「悦楽」を知る事によって楽天的であり得るのだと考える。

続けてエマソンが「森林には永久の少時（ユース）あり」と言い、「すべての卑野なる自負（エゴチズム）を解脱するの思ひあり」と述べた一節を引用している。一七世紀はじめ、初志に反してニューイングランドに不本意ながら上陸し、住みつくことになったピューリタンたちは、この異質な自然に直面して激しい違和感と恐怖心とを抱いたのだった。ホーソーンの『緋文字』（二八五〇）のデイズデイル牧師とヘスターが久方ぶりに森の中で再会する場面でも、森は、いかにも一七世紀ニューイングランド風のピューリタン色にみちていて、悪魔の領域とされており、同じホーソーンの、一七世紀末のニューイングランドを背景にした短篇「若いグッドマン・ブラウン」で主人公ブラウンが悪魔の集会に参加するのも暗い森の中であり、この森の中で一夜がブラウンの生涯を無残にも破壊し去るのである。ホーソーンの描いて見せた一七世紀ピューリタン世界の森

にくらべると、一九世紀の「楽道家」エマソンの森は何と  
いう明るさであるう。森の中でエマソンは「透明なる一  
球」となり、「凡ての物を見」、「神の一部分分子」と  
なりおこせる。森をふくめて自然は「悦楽」を与えるもの  
であり、その背景には、「凡ての物、凡ての期、人間の心  
の有様に感応適合せざるなき」ものであるというゆるぎな  
い自然観がある。そして、この自然の中の悦楽がエマソンの  
「楽天主義の中心」となっていることを透谷は指摘する。  
この点が「枯枝に鴉のとまる秋の暮を観じたる芭蕉とは異  
な」っていることに透谷は気づく。そして透谷もまたこの  
点でエマソンとは距離をおいている。

「斯の悦楽を生ずるの権」は自然のみに存するのではな  
く、人間にもあつてこの両者の「調和」こそが悦楽の由つ  
て来たる所である。「自然の中には大なる理法」があり、  
自然と人間の双方の上に「臨む」ものであるゆえに、人は  
「自然の友」であり、「自然との調和者」となる。こうして  
「鮮新なる」エマソンの自然の宗教が成立すると、透谷は  
考える。このような自然観は透谷にとってあきらかに「鮮  
新なる」ものであった。

『自然論』第二章の「便益」について述べた中で、自然

は感性と心霊によって享受されるものだが、心霊によるものとは対照的に、感性によって享受するものは、「凡ての人間が平等に之を享有するを得るもの」であるという一節をひいて、ここに「彼の常識あり。爰に彼の共和思想の本源を見る」(傍点筆者)と述べるとき、文明開化の時代に生き、平等に憧れた透谷の希求が明確に示される。

エマソンが「自然の中に成立てる大秩序を認め」ていることはすでに述べられていたが、エマソンが、人間に対する自然の善意を形容するさいに、「神聖なる慈悲」ということばを選んだことを評して、「エマソンの楽天主義、漸くにして顕著なりと謂つべし」というところには、エマソンとの間に透谷が隙間を感じていることがまぎれもなくうかがわれる。

第三章の「美」にかんして、自然の美しさを深く感じて、新しい形にしてあらわすのが美の創造であり、美術であるという一節にふれ、つづいて、「美術の製作はヒューマニチーの幽奥に向つて光を投ぐるものなり。……各々己れを動かしたる美の愛を満たさんが為に殊異の業の上に之を為すなり。斯の如く、美術とは、人間のランビキを通過し来れる自然の謂なり」という部分を引用する。

ここで「エマソン」の出る少し前、明治二二年に森鷗外と巖本善治との間にかわされた、いわゆる「文学と自然」論争が思い起こされる。「自然の儘に自然を写し得たるもの」が文学であると巖本が書いたのに対して、これを読んだ鷗外は、文学が写すのは「自然(ナツール)」ではなくて「精神(ガイスト)」であると反論し、またつぎの折の反論で「自然の儘の自然は美にあらず」と述べた。鷗外の論は透谷が解説したエマソンの論と一致し、巖本の論は、日本語の中で「自然」ということばがまだ日本的な伝統を十分に残しているために開化の時代に激しく揺れて不安定であることを示すものであり、鷗外が西欧的な背景の中で「自然」を譏諷語として存分に使いこなしているのとかわめて対照的である。(巖本の発言は明治文学全集、鷗外の発言は岩波版の全集(昭和五四年)による)

「教義としての自然を論」じる第五章を紹介した透谷は、「自然が人間に対する教養の職に就きての見解を説き去り、説き来り」、余すところもないと評し、「吾人宛然たる新世界の新教師としてのエマソンを観るの心地す」(傍点筆者)と結んでいる。新世界の新教師ということばにもエマソンに対する尊敬と憧憬の心がにじみ出ている。

次いで「アイデアリズムを論ずる」エマソンの中に透谷は「彼の中に潜み入りたる仏教的思想は、彼をして牢固たる現世の傍らに、輪転無常中の純理觀を尊奉」する人間を見てゐる。エマソンの教義の目的が「宇宙の終因」であり、「自然は外現にのみ存在する」のではないかという疑問が浮かぶ、という第六章「唯心」の冒頭の部分で、新約の「コリント人への第二の手紙」四章一八節の「わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ」に続く一節の「見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである」（日本聖書協会発行、一九五五年改訳版による）ということばを引用し、宗教や自然科学が、ともすれば「目に見えるもの」の实在性を信じてゐるわれわれの確信をぐらつかせるが、エマソンは自然を愛し、自然と人間との確固たる關係を打ち立てようとする。透谷のことばで言えば、エマソンは「人、物、行、事、の全環を觀るなり。国、宗教、の全環を觀るなり。……是等を以て心靈の解説に任せんが為に神の永久てふものの上に画き出たる彩色を觀ずるなり」という締めくくりとなる。エマソンも透谷も、自然の彼方に、自然を超えたものを見てゐる。

次の章「精神」に触れて、「凡ての部分と分子が均一に

關係せる通有的の美、即ち永遠の一」があると述べる。こ  
こでも、「凡ての自然と、凡ての思想の啓示」は人間の「心  
に於て」感得されるものであることをエマソンは強調する。  
第八の最終章「期望」について、エマソンが樂天主義に  
よつて、「期望を説き且つ教へ」たと言ひ、こうしてわれ  
われが「新しき眼を以て世界を視る」ことになる、全体  
的な評価を透谷は述べたのだが、ここで彼は「亜米利加の  
聴衆に対するエマソンを見れども、哲學者としてのエマ  
ルソンを見る能はず」と不満を述べて『自然論』に対する  
「拔萃」を終つてゐる。

エマソンの『自然論』はコールリッジやドイツの哲學者  
たちから彼が受けた影響を示して觀念的であり、また、理  
詰めの議論というよりはイメージの連続という趣を呈して  
おり、論理的というよりはむしろ直觀的な反応が綴られて  
いる。結果的に、O・W・ホームズの言うように、『自然論』  
は「思索的散文詩」であり、「高揚した感情の表現」とな  
つてゐる。

『自然論』が出た翌年、かつてエマソンが所属していた  
ユニテリアン派の雑誌で、エマソンを中心とするトランセ  
ンデンタリストの仲間全体に対する攻撃という形での書評

が出た。エマソンには、かつて牧師の職を退ききつかけとなつた演説に見られる、伝統的形式的な宗教に対する強い疑問があり、彼の宗教観は異端的とさえ考えられたであろうし、その、きわめて人間中心的な物の見方は、危険なほどの自信にあふれている。自然の中心に人間は立ち、自然はすべて人間に奉仕するものであるという自然観は東洋的な自然観とは対立するもので、前にも述べたように、東洋の山水画の中で極く小さな点景として人物が描かれているのに対し、西洋では風景そのものが絵画の題材となることがずつと後にはじまつており、人間中心の思想は絵画の世界にも歴然と表れている。

また、透谷もしばしば言及しているように、エマソンには「楽天主義」の傾向が色濃く流れ、それは光のみあつて影のない絵を見るような落ちつき悪さを感じさせる。透谷はカーライルに言及し、「厭世の傾を以て人間を觀じ」ていると言ひ、これに対し、エマソンは「楽天の情を以て人間を抱く」と述べる。しかも青少年時代のエマソンが暗い谷間に沈み、苦澁を味わいながら、楽天主義の境地にぬけ出したことを評価しているが、透谷は苦難に満ちたわが身の、しかも病苦に責められながらの『エマソン』執筆

中に、果たしてエマソンの楽天主義に心からの讃辞を送ることができたのであろうか。

しかし透谷は、エマソンが「築くべき為に生れた」と言ひ、エマソンの生きた一九世紀半ばのアメリカが「歴史なきの国にして、新らしき歴史を作るべきの国」であり、「打破すべきもの少くして、建設すべき者多」く、「新らしき共和主義、新らしき個人主義」のためにエマソンが「福音を説いたことを指摘している。これは新しい近代日本に生まれ変わらうとしていた明治の日本に生き、一時は政治運動にも身を投じて挫折した透谷に強く訴えるものがあつた。

エマソンを「デモクラシーの新紳士」と呼び、エマソンが「亜米利加の新しき民」に「爾自らを信ぜよ」と教えたことにも感銘を受けた。しかもエマソンの「自信」の秘訣が「自然」に従順であることに基くと透谷が考えていることは注目すべきことである。

『自然論』から八年たつて発表されたエッセイ「自然」(一八四四)には透谷は触れていない。「自然」では八年前のエマソンのあの昂揚ぶりは影をひそめ、天かける勢いの華麗な観念論はぐつと調子を下げ、現実的で、いささかの暗ささえ加えている。

死を間近に控えた透谷の目に映ったエマソンは輝かしい存在であり、彼の『自然論』はまばゆい金字塔であった。開化の時代、明治に生きた透谷もまた、日本語の伝統の中で不安定に揺れ動く「自然」ということばが、「ネイチャー」という外来語とぶつかりあつて、訳語として深さを、広がりを加えながら定着していく過程に密接にかかわりあつた一人であつた。しかも、「自然」の中にも、「超自然」の要素がひそんでおり、「ネイチャー」の中にも「スーパーナチュラル」なものへの暗示が含まれると考えられていることは興味ある事実である。『エマソン』執筆の直前、明治二六年五月の「内部生命論」で、「センシユアル、ワールド」を離れて「何処までも生命の眼を以て、超自然のものを観るなり」と言い、翌月の「熱意」では「自然を超えて自然以外の物を視る」とも言う。

自然ということばが定着していくにつれて、日本の自然観にも西欧的な香りが浸透するようになる。『エマソン』もその働きかけの重要なものに数えられる。また、たとえば、ツルゲーネフの『獵人日記』のうちの一篇「あひびき」が邦訳されたのは明治二二年夏のことだったが、その自然描写は、二葉亭四迷の魅力あふれるみごとな口語訳とあい

まつて人びとに深い感銘を与えた。国木田独歩が明治三一年に執筆した「武蔵野」に見られる、武蔵野の美しさへの傾倒ぶりは、それ以前には見られなかったもので、渋谷村の小さな家を出た「自分」は一〇月二五日には「野を歩み林を訪ふ」ており、十一月八日には『月を踏で散歩』している。林の木は「重に楡の類」であるが、「元来日本人はこれまで楡の類の落葉樹の美を余り知らなかった様である」ので、楡の林の中の散歩が度重なつて、「自分がかかる落葉林の趣きを解するに至つた」のは「ツルゲーネフの書たるものを二葉亭四迷が訳して『あひびき』と題した短篇」の「微妙な叙景の筆」によるものである、と言う（筆者註 明治文学全集版では「あひびき」）。

「武蔵野」にも登場する「散歩」は古くからあつたことばで、白楽天の詩にも見られるものだが、たとえば漱石の作品には、『吾輩は猫である』の十九回をはじめとして数多く見かけられる。この頻度も明治以後の日本人の自然とのかかわり方の変化を示すものと考えることができよう。

「自然」は元来の意味を保持しながら、ネイチャーからの意義やニュアンスを加えて、変化発展をつづけた。そして、いまだに両者は微妙なずれを示し続けている。